

# 臨床心理士養成大学院におけるスーパーヴィジョンのあり方

## A way of supervision in clinical training for candidates of clinical psychologist

野島一彦

跡見学園女子大学

人文科学研究科

Kazuhiko Nojima

Division of Clinical Psychology,

Graduate School of Humanities, Atomi University

### 要 約

臨床心理士の養成にあたり、諸学習形態の中でも、とりわけスーパーヴィジョンは重要でかつ有効な学習形態であるという認識に立ち、以下の3点について論じた。

(1) 筆者のスーパーヴィジョンの考え方＝スーパーヴィジョンの目的/スーパーヴィジョンの担当者/スーパーヴィジョンの諸タイプ/スーパーヴィジョンの進め方。

(2) 本学のスーパーヴィジョンの実際＝院生のスーパーヴィジョン/スーパーヴァイザー養成：「スーパーヴィジョン研修会」。

(3) 臨床心理士養成大学院におけるスーパーヴィジョンのあり方＝多様なスーパーヴァイザーの確保/“スーパーヴィジョン・アドバイザー”の設置/お兄さんの・お姉さんのスーパーヴァイザー”の養成と活用/大学院と臨床心理士会との連携。

【Key Word】臨床心理士養成大学院，臨床心理実習，スーパーヴィジョン

### I はじめに

臨床心理士は、臨床心理学など心理学の知識や諸技法を生かして、心の問題にかかわる「心の専門家」である。その認定は、1988年から日本臨床心理士資格認定協会が行っているが、2013年4月1日現在で26,545名が認定されている。

その4大業務は次のようである。

- ① 臨床心理アセスメント：心理テスト、行動観察、面接等を通して心理アセスメントを行う。
- ② 臨床心理面接：心理カウンセリング、

精神分析、夢分析、行動療法、来談者中心療法、遊戯療法、箱庭療法、芸術療法、催眠・自律訓練法、森田療法、内観療法、動作法、フォーカシング、ゲシュタルト・セラピー、イメージ療法、論理療法、家族療法、グループ・アプローチ、コミュニティ・アプローチ等を通して心理援助を行う。ただ、臨床心理士はすべてをマスターしているのではなく得意な技法をいくつか持っておりそれを使う。

- ③ 臨床心理的地域援助：本人だけでなく

環境への働きかけ、専門家との連携、地域社会への介入等を行う。

- ④ 臨床心理学的研究：実践を豊かにするための研究を行う。

これらの業務を行う臨床心理士は、現在160の指定大学院と7つの専門職大学院で養成されている。2005年度に創設された本学の臨床心理学専攻は第一種指定大学院となっている。本学を含め多くの臨床心理士養成大学院では、次のような形態の学習が行われている。

- ① 認知的学習：講義、読書等を通して、心理学一般、精神医学、福祉学、文学、教養等について学ぶ。
- ② 観察学習：陪席、DVD等を通して学ぶ。
- ③ 体験学習：クライアント体験、グループ体験、フォーカシング体験、エンカウンター・グループ体験等を通して学ぶ。
- ④ 実習経験：学内実習＝相談所実習、学外実習＝教育、医療・保健、福祉等の領域での実習等を通して学ぶ。
- ⑤ 実習経験の検討：ケース・カンファレンス、スーパーヴィジョン等を通して学ぶ。

これらの諸学習形態の中でも、とりわけ実習経験の検討を行うスーパーヴィジョンは重要でかつ有効な学習形態である。ただ一口にスーパーヴィジョンと言っても、必ずしも定式化されておらず、いろいろな考え方・やり方がある(黒川, 1992, 鎌・滝口編, 2001, 平木, 2012)。

そこで本稿では、第1に筆者のスーパーヴィジョンの考え方を述べる。第2に本学のスーパーヴィジョンの実際を紹介する。第3に臨床心理士養成大学院におけるスー

パーヴィジョンのあり方について提言を行う。

## Ⅱ 筆者のスーパーヴィジョンの考え方

### 1. スーパーヴィジョンの目的

スーパーヴィジョンの目的は、次のとおりである。

- ① スーパーヴァイザーの〈意欲〉の向上：やる気を起こさせる。
- ② スーパーヴァイザーの〈能力〉の向上：相手についての「見立て」(理解)と「手立て」(関わり)の力のアップさせる。

時折、スーパーヴィジョンを受けて意欲がそがれたり落ち込んだりするといったことを耳にするが、それは目的に反することである。

### 2. スーパーヴィジョンの担当者

#### (1) スーパーヴァイザー

臨床心理士養成大学院のスーパーヴァイザーは、①教員、②OB、③外部者(臨床心理士、精神科医等)である。

ただ、教員が担当することについては、異なる見解がある。一方では、教員が担当することは、教員一院生、スーパーヴァイザー—スーパーヴァイザーという二重関係が生じるので、職業倫理上問題があり、教員が担当してはならないという見解である。他方では、地域的に外部からのスーパーヴァイザーに依頼することは困難であるので、教員が担当するのはやむをえないという見解である。

#### (2) スーパーヴァイザーの役割

- ① スーパーヴァイザーのやる気を育てる  
混乱したり自信をなくしたり疲れたり傷ついたりしているスーパーヴァイザーにエ

エネルギーを充電して、「さあ、やっていこう！」とやる気を持てるようにということを心がける。

② ケースとスーパーヴァイザーを安全に守る

難しいケースでは、援助構造が不安定になり、ケースとスーパーヴァイザーの双方が危険な状態に陥ることがあるが、そのような時にそれについて指摘するとともに対応について話し合う。

③ サポートティブな態度を維持する

スーパーヴィジョンでは安心感・信頼感が大切であると考えるので、一貫してスーパーヴァイザーを尊重し、温かなサポートティブな態度を維持するようにする。

④ ケース理解を深め広げる

ケースの心理の理解、行動の意味の理解等について、スーパーヴァイザーにできるだけ意識化・言語化してもらった上で、それ以外の理解もあることをスーパーヴァイザーのコメントを通して知ってもらい、ケース理解を深めたり広げる。

⑤ その人の持ち味を生かす

ケースへの関わり方を問題にする時、スーパーヴァイザーの持ち味(パーソナリティー)がうまく生きていくようなやり方とは何かということに気を配る。スーパーヴァイザーとスーパーヴァイジーは違った持ち味を持っているので、スーパーヴァイザーの持ち味を生かしたやり方を押し付けるのではなく、スーパーヴァイジーの持ち味が発揮されるようなやり方を考えていく。

⑥ スーパーヴァイジーのパーソナリティーの問題には深入りしない  
スーパーヴィジョンを進めていくうち

に、単なる技法の話しだけに留まらず、スーパーヴァイジー自身のパーソナリティーが問題になってくることがあるけれども、そこには極力深入りしないようにする。そのようなことは、できれば教育的カウンセリング(教育分析)という構造の中で扱う方がよいと考える。

### 3. スーパーヴィジョンの諸タイプ

#### (1) 個人スーパーヴィジョン

個人スーパーヴィジョンは、二者関係(一人のスーパーヴァイザーと一人のスーパーヴァイジー)のなかで行われるものである。個人スーパーヴィジョンの特徴は、①安全感が高い、②きめ細やかな関わりができるという点である。

#### (2) グループ・スーパーヴィジョン

グループ・スーパーヴィジョンは三者以上関係(一人のスーパーヴァイザーと複数のスーパーヴァイジー)のなかで行われるものである。グループ・スーパーヴィジョンの特徴は、次のようなグループ特有のメカニズムが働くという点である。

- ① 経済性(労力的、時間的、金銭的に経済的)。
- ② 観察効果(他のスーパーヴァイジーの事例を聞くことで視野が広がる)。
- ③ 普遍化(他の人も自分と同じように苦労したり悩んだりしていることを知り気が楽になる)。
- ④ 希望(自分の事例がうまくいっていない時に、他の人の事例がうまく展開しているのを知ることでも自分もやれるかもしれないと希望が持てる)。
- ⑤ 多様なダイナミックな相互作用(スーパーヴァイザーとスーパーヴァイジー、

スーパーヴァイザーとスーパーヴァイジーの間での多様なダイナミックな相互作用が起こる)。

- ⑥ スーパーヴァイジーのスーパーヴァイザー的機能の活用(スーパーヴァイジーが他のスーパーヴァイジーに質問したり意見を述べることでスーパーヴァイジーのスーパーヴァイザー的機能が活用される)。
- ⑦ スーパーヴァイザーへの依存性が強くなりすぎない(スーパーヴァイジーが複数おり、スーパーヴァイジー同士の相互作用も行われるため依存性が強くなりすぎない)。

### (3) スーパーヴィジョン・グループ

三者以上関係(一人のスーパーヴァイザーが一人のスーパーヴァイジーを指導する場面に他の院生等が同席)で行われる。このスーパーヴィジョン・グループの特徴は、グループ特有のメカニズム(前述)が働くという点である。

### (4) ピア・スーパーヴィジョン・グループ

三者以上関係(特定のスーパーヴァイザーはいない場面で、三名以上の複数の院生等が相互にスーパーヴィジョンをする)で行われる。ピア・スーパーヴィジョン・グループの特徴は、グループ特有のメカニズム(前述)が働くという点である。

## 4. スーパーヴィジョンの進め方

### (1) 資料の準備

スーパーヴィジョンにあたり、資料をどのように準備するかをめぐり、次のようなやり方がある。

- ① 記憶のみ(資料なし)で行う。
- ② 概要を記載した資料をもとに行う。

③ 録音記録の逐語録をもとに行う。

④ ビデオやDVDによる録画資料をもとに行う。

⑤ ライブ場面で行う。

### (2) 「見立て」(理解)と「手立て」(関わり)の検討

スーパーヴィジョンでのスーパーヴァイザーとスーパーヴァイジーのやり取りは、ケースについての「見立て」(理解)と「手立て」(関わり)の検討を行う。スーパーヴァイザーは、スーパーヴァイジーがケースについての「見立て」(理解)と「手立て」(関わり)について意識化・言語化できるよう促すとともに、「見立て」(理解)と「手立て」(関わり)の役に立つようなコメントを伝える。

## Ⅲ 本学のスーパーヴィジョンの実際

本学では、当初からすべての院生のすべてのセッションのスーパーヴィジョンを日常的に行うとともに、本年度からは修了生に対するスーパーヴァイザー養成も試みている。

### (1) 院生のスーパーヴィジョン

院生のスーパーヴィジョンの担当者は教員(複数、臨床心理士)に限定されている。そして、スーパーヴィジョンは正規の授業(「臨床心理特別実習」として位置づけられている)。

院生は次のような流れでスーパーヴィジョンを受ける。

- ① 学内実習施設である心理教育相談所の「インテーク・カンファレンス」でケース担当希望者が募集され、手をあげた院生の中からケース担当者を心理教育相談所長が指名する。

- ② ケース担当者はできるだけその日から3日以内に複数教員の中から自分が希望するスーパーヴァイザーにコンタクトをする。
- ③ そして「事前スーパーヴィジョン」を受ける。そこでは、インテークシートをもとにスーパーヴァイザーとスーパーヴァイジーで話し合い、ケースについてのイメージアップを図り、見立てを手立てについて確認する。
- ④ 院生が担当するケースとのやり取りは、(ケースの承諾が得られない場合を除き)基本的に録音(あるいはビデオ録画)が行われる。そして毎セッション後に院生は、“概要”(1枚に観察、面接やプレイの流れ、感想、検討していただきたいことの4点を記載)と“逐語録”をもとにスーパーヴィジョンを受ける。

## (2) スーパーヴァイザー養成：「スーパーヴィジョン研修会」

本専攻では1期生(十数名)が、(資格を取得して丸5年経過の)1回目の臨床心理士の更新をしたばかりである。これまでは、そのような修了生が育っていなかったこともあり、教員のみでスーパーヴィジョンをやらざるを得なかったが、筆者は修了生にもスーパーヴィジョンを担当してもらうことはできないだろうか考えた。

ちなみに筆者の前任校である九州大学ではずっと以前から、1回目の更新を終えた修了生を「面接指導員」として委嘱し、実際に院生のスーパーヴィジョンを担当してもらっている。このようにすることのメリットは、院生は(教員に対するよりは)気軽にスーパーヴィジョンをうけやすくなるし、修了生は指導的立場を担うことで改め

て自分自身の臨床能力を高めることになる。

そこで筆者は修了生に、スーパーヴィジョンについて学ぶ機会を与えるために本年度(平成25年度)から「スーパーヴィジョン研修会」を、毎月1回(2時間)開催することにした。その進め方は次のようである。

- ① 小グループ場面で、修了生の一人がスーパーヴァイジー、筆者がスーパーヴァイザーとなり、1時間のライブ・スーパーヴィジョンを行う。
- ② その後の1時間は、そのスーパーヴィジョンについてのディスカッションをする。

尚、この2時間はビデオ録画を行い、録画されたものはスーパーヴァイジーに渡すとともに心理教育相談所にも保管される。

## Ⅳ 臨床心理士養成大学院におけるスーパーヴィジョンのあり方

### 1. 多様なスーパーヴァイザーの確保

院生のスーパーヴィジョンを専攻の教員だけが担当していると、院生は限られたスーパーヴァイザーのスーパーヴィジョンしか体験できないし、狭くなる。院生にとっては特定のスーパーヴァイザーだけでなく、多様なスーパーヴァイザーのスーパーヴィジョンを体験することが勉強になる。そういう意味では、修了生のスーパーヴァイザーを活用することは一つのあり方であろう。

それに加えて、外部の臨床心理士や精神科医もスーパーヴァイザーとして活用する事も大事である。外部のスーパーヴァイザーは、その専攻の教員や修了生と違う風土で育っており、フレッシュな刺激を院生



に与えてくれることが期待できる。言わば、異文化交流をするようなものである。

## 2. “スーパーヴィジョン・アドバイザー”の設置

わが国ではこれまでにないと思われるが、“スーパーヴィジョン・アドバイザー”を置くことも検討に値するであろう。その役割は、大きく2つである。

- ① 院生が、自分が担当するケースについて、どのスーパーヴァイザーにお願いするのがいいのかについて相談にのる。院生が持っている限られた情報だけでは、スーパーヴァイザーの選択は難しいのではと思われるので、各スーパーヴァイザーの特徴を知っている“スーパーヴィジョン・アドバイザー”がいるとより適切なマッチングができるのではなかろうか。
- ② スーパーヴィジョンを受けて院生が、何かしっくりしない、あるいはいろいろ指摘されてスーパーヴァイザーに怖さを感じる等の場合に、話を聞き、サポートをする。

## 3. “お兄さんの・お姉さんのスーパーヴァイザー”の養成と活用

臨床心理の業界では、ベテランのスーパーヴァイザーの数は限られており、院生のスーパーヴィジョンを担当してくれる人を捜すのは難しい。だからと言って、スーパーヴィジョンの機会を院生に与えないわけにはいかない。

そうすると、修了生を対象に“お兄さんの・お姉さんのスーパーヴァイザー”を養成し、活用することが考えられる。本学で

は、修了生で臨床心理士資格を1回、更新した人達を“お兄さんの・お姉さんのスーパーヴァイザー”として養成することを始めているが、このようなやり方は新しいあり方になるであろう。

尚、このようなスーパーヴァイザー養成では、次のような工夫が必要であろう。

- ① ベテランのスーパーヴァイザーによるライブ・スーパーヴィジョンを「観察学習」させることである。講義、読書による「認知学習」だけでは、具体的なことが分かりにくいので、「観察学習」は必須である。
- ② “お兄さんの・お姉さんのスーパーヴァイザー”による「スーパーヴィジョン・カンファレンス」を開催することである。ケースについてのケース・カンファレンスはどこの大学院でも日常的に開催されているが、スーパーヴィジョンについてもカンファレンスが必要である。特に“お兄さんの・お姉さんのスーパーヴァイザー”の場合は、あまり慣れていないし、不安も強いので、「スーパーヴィジョン・カンファレンス」を通して、意欲と能力を高めていく必要がある。
- ③ “お兄さんの・お姉さんのスーパーヴァイザー”のスーパーヴィジョン体験のスーパーヴィジョンの機会をつくることである。スーパーヴィジョン体験の検討は「スーパーヴィジョン・カンファレンス」でもできるが、よりきめ細かな指導とサポートにはスーパーヴィジョンが有効である。

## 4. 大学院と臨床心理士会との連携

スーパーヴィジョンを担当してくれる外

部者(臨床心理士)を一定数、確保するためには、教員の個人的コネだけでは限界がある。それで、大学院側と臨床心理士会が組織的に連携することが考えられる。例えば都道府県ごとに大学院側の協議会のようなものを作り、そこでその地区での必要なスーパーヴァイザー数を取りまとめ、臨床心理士会に推薦を依頼するのである。臨床心理士会側は、その依頼に応じて、交通の便等も考慮しながら、それぞれの大学院に必要なスーパーヴァイザーを推薦するのである。

尚、このようなことが可能になるには、臨床心理士会側におけるスーパーヴァイザー養成が欠かせない。臨床心理士の卵である院生を育てるために、臨床心理士の職能団体である臨床心理士会側はそのようなことを企画・実行することが必要であろ

う。

## 付記

本稿は、2013年12月1日開催の日本臨床心理士養成大学院協議会のFD研修会におけるシンポジウム(臨床心理士養成大学院における実習指導ガイドラインの策定)で発表した内容をもとにまとめたものである。

## 文献

- 平木典子(2012)．心理臨床スーパーヴィジョン．金剛出版．
- 黒川昭登(1992)．スーパーヴィジョンの理論と実際．岩崎学術出版社
- 鏑 幹八郎・滝口俊子(2001)．スーパーヴィジョンを考える．誠信書房．